

人生
記録

コスモスの記

— 五人の戦死者を出したある農家の100年 —

農家の主婦

高岡なを著

文 理 書 院

農家の主婦 高岡なを 著

人生
記録

コスモスの記

風吹くままなびき従う花なれど

その根は強し庭のコスモス



——五人の戦死者を出したある農家の百年——

文 理 書 院

著者略歴

一、一九二八年（昭和三年）

千葉県に生まれる

一、一九四三年（昭和十八年）

高等小学校卒業、家業手伝い

一、一九四五年（昭和二十年）

現在の夫、高岡章一と結婚、農業に従

事し今日にいたる。

一、住所、（289-03）千葉県香取郡小見川町富田九九五

コスモスの記

¥ 430

1969年1月15日 第1版発行

著者 高岡 な を

発行所

郵便番号 162
東京都新宿区喜久井町51
振替・東京 196621
電話(202) 9611(代)

株式
会社

文理書院

- 図書目録は申し込み下さい進呈します（印刷・大文社）
- 本社の本が書店にないときも本社にはありますから書店に取寄せてくれるようご注文になれば一週間位で入手できます。
- 直接ご送金下されば送本申し上げます。（送料は70円）

まえがき……………高岡なお

(著者)

この本ができるまで……………寺島文夫

(人生手帖主筆)

推薦の言葉

農村と農民の生きた歴史……………和田金次

(千葉県農村中堅
青年養成所所長)

土に生きる人間の記録……………早船ちよ

(作家)

人間を見る眼のたしかさ……………橋本英吉

(作家)

土に生きる人々の一〇〇年……………中神秀子

(評論家)

まえがき

高岡なを

この書を書くまで、私は長い間、胸の中のしこりをどうすることもできず苦しみました。結婚によって、平凡で幸福な生活を送ってはいましたが、我が身が幸福なら幸福なだけ、兄たちのことが思い出されて、自分だけがこうして幸せてよいのだろうか、申しわけない気持ちになるからでした。

戦争を知らぬ子供達は、恵まれた環境の中で、のびのびと育って行きます。この子供達に、再びあのような戦争の悲しみをさせてはいけません。同時に、日本の土台を支える力となった兄達や、父のことを忘れさせたくない。戦争そのものの記録や、なになに司令官といった有名な人のことなら、専門家の手によって、後世に伝えられるであろうが、名もない一農民が出征させられて、遠い異国のはてで下積みのまま戦死した、その兄達のことを、ただ墓石だけにしておいてよいだろうか。……思い出の記を書こう。子供達が成長して、時間にゆとりができた時、私は書くことを思い立ったのです。もともとのを書くことは好きでしたが、二十年近くもほとんどペンを持たなかった私は、はじめは、何から書いてよいのか、書きたいことばかり多くてまとまりませんでした。そればかりか、三十分も書くと、頭も、目もかすんでしまったりして、とてもだめだ！とあきらめたことも何度かありました。しかし、ここで私がくじけたら、兄達のことを誰が伝えるであろうと思ひ立ったのです。

七回忌、十三回忌と供養することに、肉親が集り、故人をしのぶのだが、語れば涙が先になって言葉にならず、子供達はしめっぽい話には耳を傾けません。やっぱり書こう、書きさえすれば永久に残る。兄達の霊を慰めるより、まず自分を慰めるつもりで、あせらず、一生かかってもいいというつもりで書いたので、ノートにまとめ上げるのに五年もかかってしまいました。それが、ふとした縁で寺島先生が知られて「人生手帖」に載せていただくことになり、また、このような単行本として出版していただき、この上ない光栄と感謝しております。

この本ができるまで

寺島 文夫（人生手帖
主筆）

高岡なをさんが一家の歴史を記録したメモをおもちだということ、短歌を趣味として作るということ、とを「農業共済新聞」で拝見し、その人生記録を「人生手帖」に連載したいと思いました。その頃、明治百年ということで大雑誌が、有名人に父や祖父のことなど書かせていました。私は意地を張るような気持ちで、高岡さんの、名もない農家の歴史を連載しました。そして小笠原諸島が二十三年ぶりに返還され、その一つの硫黄島へ遺骨収集団が出かけたという報道と、筆者の兄源八郎さんが硫黄島で戦死したところまで書きすすんだ偶然の一致に、私は、この記録を、わたしたち庶民の「明治百年の記念碑」として一冊の本にして残したいと決心しました。こうした共感、私自身、高岡さんと同じように貧しい農家の生れであったことに由来するものであるかもしれません。（一九六八年十月）

農村と農民の生きた歴史

和田 金次

(千葉県農村中堅青年養成所所長)

子どもの養成所教育では、書くことをだいにします。

女子の研修生は、母の歴史を書く。母の歴史をつづるといふ作業をおして、より深く母を理解することができる。

しかし、それだけではない。母の生き抜いてきた道すじという事実を検証することによって、その背景となっている時代を知るに役立つからである。

三年前である。一冊の本となった母の歴史を読んでいくと、夫を戦場に送った妻とし嫁としての体験、家庭のなかの人間疎外など、胸のつまる思いがしてきた。そのなかで、短歌や俳句でその場面がありありと描写されている一篇があった。ホッとした安らぎのようなものを感じ、思わずほほえみが湧いてきたことを忘れない。それが、高岡なをさんを母として綴った娘さんのものであった。

なをさんは、戦争による体験をいやというほど味わい、嫁しては夫と力を合わせ、二代の姑に使え、しかも農業に夢を持ち続けてきた一人の農村女性である。

けわしい労働のなかで、書きつづることはよいではない。にもかかわらず、書き続けさせたもの

がある。それは、おそらく、書きとどめずにはおられなかった、なをさんの願望と内在した筆力であったのだろう。

働く農村女性の書いた『コスモスの記』が出版され、その背景をなす農村と農民の生きた歴史が、多くの人々に関心と共感をよぶであらうことを信じて推せんの言葉とする。

土に生きる人間の記録

早 船 ち よ
(作家)

『コスモスの記』をよみはじめたら、面白くて、一気に、さいごまで読みとおしました。ここには、千葉県八日市場、利根用水ベリの子たくさん小作農の生活が、祖父母の代から、ずうっと太平洋戦争末期まで、かかれています。どこにもありそうな日本の農家の百年の歴史が、父母や兄弟を中心に、いきいきと描かれています。

描き手は、農家の主婦の高岡なをさん。どこの農村でも、ひょいと出あいそうな農婦であることも、親しみを感じさせます。——こういう生活記録は、それだけでも貴重なものだと思いますが、たんとんとした語り口に、実感がこもっていて、出てくる人物ひとりひとりが、身内のように感じられました。

兄たちが、つぎつぎに召集され、出征し、戦死していく、太平洋戦争のころの記録は、よんでいて、辛くなりました。あとにのこされた人びとの農作業も、生活も、きつく苦しく、ふたたび、あんな思いはしたくないと、痛感させられます。

——コスモスは、あらしに叩きつけられ、泥まみれで地に伏しても、やがて頭をもたげて、第二の

美しい花を咲かす——とは、なをさんのことばです。

一家のひとびとは、とくに戦争によって、手ひどい打撃をうけますが、土に生きる農民の根強さで立直って、生きていきます。

『コスモスの記』は、硫黄島からの源八郎の手紙の章までに重点がおかれていますが、その後の二十何年かのようなぬ歴史も、また、書いてほしいと思います。

人間を見る眼のたしかさ

橋 本 英 吉
(作家)

私が、高岡さんの、この記録をはじめてよんだのは、「コスモスの記」として「人生手帖」に連載中、七回目の「よしきり」の章だった。頭休めに何気なく読みはじめると、本職も及ばぬ美しい描写に打たれたのが嬉しくて、寺島主筆に手紙を書いたほどだった。

まだ小学生だった筆者が、兄夫婦について利根川付近の水田に、稲運び用の舟で出かけた時の話である。昼休みに、葦の中につないである舟で昼寝をしている兄が、汗を流しながらイビキをかいている。妹がその汗を拭いてやると、手も足も真黒に日やけているが、真白な胸を手拭でこすると、その跡が紅色になって、男の肌の美しさに驚いたというのである。

僕はそれから「人生手帖」の前号を第一回から読んだのだが、回が進むごとに筆者の才能は幅が広く、人間を見る眼の正確さに圧倒された。これが高等小学校（現在の中学二年）を卒業しただけの女性の筆だろうかと思ふほどだった。

安政年間に筆者の祖父が、宮内家を創立した時から筆を起しているから、父母たちに聞いたところでも、登場人物の性格までつかみ、当時の社会事情まで理解し、短かいけれど鋭い批判を下してい

る。父母兄弟に対しても批判すべき処はのがさないが、女でなくては示せない温か味が心よい。

例えば戦前は何処でもそうであったように、軍隊は絶対であり、召集を表面では誇りとしたが、その裏にある家族の複雑な心情なども適確にとらえている。しかも具体的に書いているので、読者は抵抗なく筆者の言うところを受入れることができる。筆者の家族には男子が多く、ほとんどが兵役に関係があつて、戦死者を五人も出しているのに、暗い影があまりないのは、明るくて辛抱よく、物事を広く見る筆者の人柄が、文章にも現れたのではあるまいか。

明治百年を機会に、軍国主義的傾向を復活させようとしている。しかしこの百年の間には、国を外国軍隊に占領され、四百万の人民が犠牲となり、あらゆる大都市が灰になったという、我が国の歴史には一度もなかった汚点が含まれている。二十余年の間にこのことを頬被りして、繁栄の時代としようとしている。お祝いどころではない。後世の史家を待つまでもなく、心ある人びとはこの矛盾を怒っている。僕は怒るに足る証言として、この『コスモスの記』のような、一人の英雄も将軍も登場しない、土に生き、働き、死んだ農民の一大絵巻を、若い人びとに読んでもらいたいと思う。

土に生きる人々の一〇〇年

——この記録を手がかりとして『明治百年』を——

中 神 秀 子

(評論家)

東北の農村地方には、「七度饑飢にあうとも一度の戦にあうな」「戦争は三代たたる」ということわざがあるといえます。

そのように語りつたえられるほどにも、農民はもちろん一般庶民にとってなによりもおそろしかった戦争、その戦争を、明治維新以来くりかえしくりかえして、ついに四百万の日本人と数百万の他国人（とくに朝鮮、中国をはじめとするアジアの諸国民）の命をうばいながら敗戦に突入していったのが、一九四五年八月十五日までの軍国主義日本の歩みでした。

著者なをさんの父親は、日露戦争に出征し、戦功によって金鵄勲章きんしゆくんしょうをもらったのですが、それがもとで在郷軍人会その他、軍国主義体制に奉仕させられ、そのために家業の農仕事もろくにしないような男になってしまいました。これを怒った祖父は「勝明をこんな外れ者にしたのは、あのきんし勲章のせいだ。あんなものをもらったがために勝明はのぼせあがって出歩いてばかりいる。あんな勲章は取り上げてしまってくれ」と役場へねがいでたのです。しかしその勝明も、日露戦争の戦場で、「おれが死んだら妻子が困る。どうか見のがしてくれ」とごん壕にしがみついていたのむ兵隊を、むり

やりにひきずりだして戦闘させ、戦死させてしまったことが心の傷となって苦しみつづけなければならませんでした。

一九三一年（昭和六年）の柳条溝事件にはじまる中国侵略から一九四一年（昭和十六年）さらに太平洋戦争に拡大された十五年間の戦争では、最初に著者の次兄（長作）が、せっかく生まれたばかりの子供に心をのこしながら、昭和十四年十二月戦死。わずか一カ月をおいて三番目の兄（正三郎）が中国の戦場で戦死。力をおとした父親は昭和十六年七月に亡くなりました。

「兄ィ、外国には珍しい物もいっぱいあるべが何もいんねえ。丈夫な体は何よりのみやげだ、頼むよ」と、戦地にゆく息子に戦死してくれるなと母親がこめたねがいもむなしく、昭和十九年四月には長兄（勝信）が、ふたたび故郷の土を耕やすときのおぼえに「田の部」「畠の部」として戦場で記した二冊の農業日誌をのこして、戦死してしまいます。

少年戦車兵として入隊した五番目の兄（源八郎）は、昭和二十年三月硫黄島で玉碎。嫁がほしくて「新郎不在」の結婚式をあげさせた四番目の兄勇次も戦病死してしまうのでした。

ひとつ家から五人の息子たちをうばい去った戦争は、一方ではのこされた家族に女手ばかりの農作業をつづけさせ、女たちに「死んだほうがましだ」というほどの精神的肉体的な重荷と苦痛をあたえました。

侵略戦争とむすびついた近代日本の資本主義は、ひとえに国民の犠牲のうえに発展してきたもので

すが、なかでもまずしい農村の人たちはその最大の犠牲者でした。著者の五人の善良な兄たちは、それでも思いどおりにはいけない生き方をしられながら、しかもや々と手にいれたほんのささやかな生活を一瞬にしてとりあげられ、若いいのちまで断ちきられてしまった、その無念さはどれほどだったか。

この無念さをどんなにもしてはらしてやりたい。それはおさなかつた著者の胸に、残酷なまでに刻印された決意ではなかつたでしょうか。その秘められた決意が、当時から二十年余をすぎた今日、農作業にあけくれる一農家の主婦をかりたてて、原稿用紙にむかわずにはいられなくしたにちがいありません。のこされたものとしてなをさんは、この記録を書かずにはいられなかつたのです。

職業的な文筆家ではない著者に、素朴でありながら表現ゆたかな生きた文章を縦横に駆使させたものの、それもおそらくは、死んだものにかわつて、という思いのはげしさなのではないでしょうか。

さらに、この記録には五人の戦死者にからんで、当時の、また現在にもひきつづく農村の衣食住、農作業、しきたり、親子きょうだいや夫婦や嫁しゅうとめの問題などが、具体的にかかれています。ということも、貴重であり注目したい点です。

いま、自民党政府は「明治百年」の宣伝にやっきとなっていますが、そのいわゆる「百年の栄光」が、けつして国民の大多数である一般庶民のぎせいの上にきづかれたものだという事実を、農民の生活そのものを描いたことによって、この記録は、たくまずしてあきらかにしています。

明治以後の庶民の歴史、支配者と名のあるものの歴史のかけにかくされてしまっている庶民の歴史は、働くものの現在と未来をささえるために、働くものの手でもっともっとほりおこされなければなりません。

若い人たちが、自分の親たち祖母たちがどんなふう生きてきたかを書きつぐとき、戦争体験をふくめて、近代日本の働くものの百年を、私たちみんなの共同の財産とすることができないのではないのでしょうか。

そのための手がかりとしても、わが国の歴史の中ではじめて、農業のきびしい仕事をしている農婦の手で書かれたこの記録が、たくさんの若い人たちによまれることをねがってやみません。

目次

一	コスモス(序章)……………	元
二	わが家の祖、藤五郎……………	三
	たきぎ売り・祖母のあき・新生活……………	
三	父、勝明のこと……………	六
	別れのボタモチ・金鶏勲章・裏切られた友情・予備召集……………	
四	次男、長作のこと……………	六
	召集令状・鍛冶屋奉公・正行戦死のしらせ・分骨……………	
五	三男、正三郎のこと……………	九

総領に生まれたかった・性教育・あやまち・おれは死がぬ・
手紙・祖母の涙・世間のうわさ・満州からのお客・留守番を
した日